

『雑草のはなし』

田中 修著（中央公論新社、2007年3月）

理工学部教授 田 中 修

本書の「はじめに」に、私は次のように書いた。「数年前、コンクリートの割れ目に芽生えて根を肥大させたダイコンは、『ど根性大根』と騒がれた。しかし、コンクリートの割れ目に芽生えて花を咲かせ子孫（タネ）を残して生涯を終える元祖は、雑草たちだろう。

多くの雑草たちは、都会の片隅で、栽培されている植物に遠慮しがちに生きている。人間に望まれないので、目立つほど大きく成長しない。目立てば刈られるから、ひっそりと暮らしている。そんな生き方から、これらの雑草たちは、都会生活の「負け組」のような印象を受ける。

しかし、雑草たちは、決して、都会生活の負け組ではない。抜かれても、踏まれても、嫌われても、しぶとく生きている。誰にも頼らず、自分の力で生き抜いていける雑草たちは、まちがいなく「勝ち組」である。田園の地でのびのびと繁茂している雑草たちが、その環境における勝ち組であるのと同じように、都会に生きる雑草たちは、都会生活の勝ち組である。

勝ち組であるからには、その生き方に秘訣がある。また、雑草たちには、歩んできた歴史があり、人とのかわりの中で生まれた話題がある。本書で、それらの一端を知ってほしい。そうすれば、雑草たちが私たち人間や栽培される植物と共生している姿が見えてくるだろう。」

これが、本書に込めた私の思いである。この意を受けて、産経新聞が、「街路樹の根元やビルの跡地、線路脇など少し気を付ければ都会でもさまざまな雑草を見ることができる。あまり知られていない雑草の名前やその由来などをわかりやすく説明する。添えられた花の写真も美しく、雑草たちの可憐な表情に気付かされる。」という書評を載せてくれた。

朝日新聞は、「コンクリートを割って生える『根性ダイコン』が時折ニュースになるが、雑草は随所で根性を見せている。在来種が急速に減っているタンポポを始め四季の雑草の見つけ方、楽しみ方を紹介。タンポポに肥料を与えた

ら、葉が50センチくらいに成長したそうだ。」と紹介してくれた。

読売新聞も「風にそよぐ姿が愛らしいセイヨウタンポポは、1本の花に200本の綿毛と種がつく。仮に1株に5個の花が咲くと、1株で1000個の種ができる計算になる。なんと恐るべき生命力！」と内容に触れてくれた。

神戸新聞は、「著者は、これまで一般向けの本を何冊も出し、植物の驚きに満ちた世界を平易に物語ってきた。」と私を紹介したあと、本書のタンポポの話を取り上げてくれた。「タンポポに抱くイメージは『野辺のかれんな草花』だろうか。ところが、タンポポの英語名が意味するのは『ライオンの歯』である。ギザギザの歯から猛獣の歯を連想するためだという。あらためて文化や民族の違いを認識させられる。

日本では外来のセイヨウタンポポが席卷している。確かに在来種より繁殖力は強いが、外来種拡大の真犯人は、なんと人間だった。しかも在来種は駆逐されてはいないという。

在来種の繁殖域を人間が開発すると、そこへ有利な受粉法を持つ西洋種が侵入してくる。しかし人間の手が入っていない地域では侵入を許さず在来種がしっかり群落を維持しているという。

雑草から連想するのは、やはり『たくましさ』だろう。タンポポがかれんに映っても在来種でさえ決してヤワではなかった。むしろ西洋人がイメージした『ライオンの歯』が当たっているかもしれない。」と、本書の内容の一部が紹介され、読後の思いが添えられていた。

最後に、私は、「本書を読んでくださった方々が、都会のあちこちで、微笑みかけるように小さなかわいい花を咲かせる雑草たちに気づかれたり、子孫を残そうと懸命に育つ雑草たちの緑の芽生えをいとおしく感じられる」ことを願っている。